

## 福祉系大学生におけるライフスキル獲得の基礎的調査（第2報）

山 本 浩 二

### A survey of welfare university first-year students' of life skills acquisition – Part2

Koji YAMAMOTO

Recently, it was pointed out that the various psychological and social problems related to changes in the environment surrounding university students were due to these students' lack of life skills. Thus, the aims of this study were (a) to clarify the characteristics and pattern of the acquisition of life skills among welfare university first-year students' and (b) to offer effective suggestions for the future of university education. In middle-April, 124 welfare university first-year students (91 male and 31 female) participated in a survey in which Shimamoto and Ishii's (2006) "a Daily Life Scales". The scale had eight sub-scales that are categorized according two general skills: skills used in mainly personal situations (planning, knowledge summarization, self-esteem, and positive thinking), and skills used in interpersonal situations (intimacy, leadership, empathy, and interpersonal manner). The results showed the following: (1) welfare university students who were members of athletic clubs acquired more life skills—namely, planning and interpersonal manner—than students who were not members of athletic clubs. (2) The characteristics of the life skills required for welfare university students were interrelated empathy, positive thinking, and interpersonal manner. (3) Finally the acquisition pattern of life skills in welfare university students could be classified into four types (introversion, self-doubt, all high score and optimism).

These results show that in the future, it will be necessary for the universities to provide extensive to support for students so that accumulation of successful experience and acquisition of communication skills.

**Key words** : ライフスキル, 福祉系大学, 新入生

Life skills, Welfare university, first-year student

### 1. はじめに

近年、青少年を取り巻く環境や科学の変化が、彼らの日々の生活の中での成長や発達においてさまざまな問題を引き起こしている。例えば、競争試験の激化や自由時間の減少な

どから起こる対人スキルの低下は、過度の不安やストレスを引き起こすなど、青少年における悩みの種の主な原因だといわれている。これらのことから、その発達の延長にある大学生をみても、対人関係能力の低下やストレスに対する不適切な対処をするなど、大学生

の心理的・社会的な問題が増加傾向にあるといわれている。その背景には、青少年が日常生活の中で求められるライフスキルや社会的スキルの欠如がこれまでも指摘されてきた<sup>1) 2)</sup>。ライフスキルとは、WHO<sup>3)</sup>によれば、対人場面で展開される社会的スキルを内包した心理社会的能力と位置づけられ、「日常生活において生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」と定義されている。また、ライフスキルは21世紀の教育目標である「生きる力」に極めて近い概念であるとされており、ライフスキルの「スキル」とは学習し、経験し、練習することによって獲得可能な能力とされている<sup>4)</sup>。これらのことから、大学生が所属する大学などの学校教育現場においては、当該スキルの獲得に向けたさまざまな働きかけが求められよう。また、学生自身も社会人として自立していくためには、対人関係能力やストレスに対して適切に対処する能力を高めておく必要がある。

そのような状況下において、欧米ではわが国よりも早くライフスキルに関する関心の高まりから、生涯発達の介入(Life development interventions)モデルに基づき、ライフスキルを評価する尺度の開発や教育プログラムの実践および効果の検証などの試みがなされてきた<sup>5)</sup>。わが国では、ライフスキルの獲得に向けた研究や実践は数少なく、上野<sup>6)</sup>が指摘しているように、ライフスキルの獲得を目指したプログラムなどが最近まで存在していなかったと考えられ、欧米に比べて取り組みが遅れている状況であるといえる。しかしながら、近年の研究において、ライフスキルと体育授業や運動部活動における運動・スポーツ活動との関係について調査した研究が教育心理学やスポーツ心理学等の領域で活発に行われている<sup>2) 7) 8)</sup>。これらの研究は大学生を対

象としてライフスキルを検討しているものの、所属や専攻する学問領域が異なる大学生については、十分な調査結果は報告されておらず、ライフスキルに関する調査研究が蓄積されているとはいえない状況であろう。

また、本研究で対象とする福祉系大学生について黒木<sup>9)</sup>は、福祉の現場で求められる人材として「人に対して優しく接することのできる明るく素直な人」と述べており、他者に対する思いやりや前向きな考え方を持つことは必要不可欠なことであるといえる。また、中井ほか<sup>10)</sup>は、WHO<sup>3)</sup>が定義したライフスキルの10の構成要素から上野<sup>11)</sup>の定義をもとに、ライフスキルを評価する項目を作成し福祉系大学生を対象に調査を行っているが、先述したように、専攻する学問領域が異なる大学生についての調査結果は十分とはいえず、本研究での調査対象となる福祉系大学生においても同様のことがいえる。福祉系大学生については、中井ほか<sup>10)</sup>の研究のほかに、山本・島本<sup>12)</sup>は福祉系大学生を対象とした基礎的な調査の第一報として、島本・石井<sup>2)</sup>が開発した一般的な日常生活場面におけるライフスキルを評価できる「日常生活スキル尺度」を用いて、福祉系大学生のライフスキルの獲得について報告している。山本・島本<sup>12)</sup>によれば、福祉系大学生に重要と考えられるスキルについて、黒木<sup>9)</sup>の先行研究から「感受性」、「前向きな思考」、「対人マナー」の3つの観点を抽出し、それを基にライフスキルの獲得レベルを検討している。この調査では、福祉系大学生に求められる上述のそれぞれのスキルを獲得するための教育プログラムの開発に加え、大学生全般に求められる「自尊心」の向上を目的としたプログラムの開発の必要性が示唆された。このような調査を継続して実施することにより、福祉系大学生の実態を把握することが可能といえよう。しかしなが

ら、福祉系大学生のみならず大学生全般においては、様々なライフスキルの獲得パターンが存在していると考えられ、そのパターンを明らかにすることによって、学生に対する効果的な働きかけや介入等の方略を行うなどの教育プログラムを実施することができよう。したがって本研究では、福祉系大学新生を対象としたライフスキルの獲得に関する調査の第二報として、性差や運動部活動所属の有無からライフスキルの獲得レベルを比較し、ライフスキル間の関係性を検討する。これらに加え、福祉系大学生の日常生活におけるライフスキルの獲得パターンを明らかにする。なお、本研究では福祉系大学生を対象としているため、対象者に必要なスキルとして、島本・石井<sup>2)</sup>の日常生活スキル尺度の下位尺度である「感受性」、「前向きな思考」、「対人マナー」に着目することとした。

## 2. 研究方法

### 2-1. 調査対象者、調査時期および手続き

調査は、関西地方の福祉系大学の社会福祉学部にも所属している大学新生の124名(2013年度：男子45名、女子14名、2012年度：男子46名、女子19名、計：男子91名、女子33名)であった。対象となった大学は、社会福祉士や介護福祉士の養成大学であった。調査は2012年と2013年の4月中旬に対象者全員が受講しているスポーツ科学に関する講義の初回授業時に実施した。調査実施の際に、本研究者が対象者に対して項目の回答内容が講義の評価等に直接関係しない事を周知した後、調査紙に回答してもらった。回答後、本研究者によって質問紙が回収された。

## 2-2. 調査内容

### 2-2-1. フェイスシート

対象者の属性に関するフェイスシートについては、性別と大学での運動部活動所属の有無について回答を求めた。

### 2-2-2. 日常生活スキル尺度（大学生版）

ライフスキルと社会的スキルに関する先行研究をもとに、島本・石井<sup>2)</sup>が開発した「日常生活スキル尺度（大学生版）」を用いて、調査対象者のライフスキルを測定した。この尺度は、「効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な心の働き」と定義され、主に個人場面で展開される「個人的スキル（計画性、情報要約力、自尊心、前向きな思考）」と、主に対人場面で展開される「対人スキル（親和性、リーダーシップ、感受性、対人マナー）」に大別される8下位尺度24項目から構成される。なお、本尺度の信頼性と妥当性はすでに確認されている<sup>2)</sup>。項目の評定は4段階の自己評定（4：とても当てはまる～1：全然当てはまらない）で行い、評定値が高いほど日常生活場面でのライフスキルが高いことを示す。

### 2-3. 統計処理

日常生活スキル尺度の得点を性差や運動部活動所属の有無からライフスキルの獲得レベルを比較するため、属性別にt検定を行った。また、福祉系大学生のライフスキル間の関係性を検討するため、Pearsonの積率相関係数を用いて検定した。さらに、福祉系大学生のライフスキルの獲得パターンを明らかにするため、全体の回答から日常生活スキル尺度の下位尺度得点を標準化し、大規模ファイルのクラスタ分析を行った。また、本研究における2013年度新生の各下位スキルの相関関係と山本・島本<sup>12)</sup>が報告した2012年度新生との比較を行った。全ての統計処理は

SPSS20.0J を用い、検定における有意水準を 5% 未満とした。

### 3. 結果

#### 3.1 日常生活スキル尺度の単純集計の結果

日常生活スキル尺度の各下位スキルと各項目の単純集計の結果を表1に示した。

各下位スキルにおいて、「感受性 (M(SD) = 8.23(2.44))」、「対人マナー (M(SD) = 8.07(3.01))」のスキルに高い値が得られた。各項目につい

ては、「困っている人を見ると援助をしてあげたくなる (M(SD) = 3.13(.93))」という感受性を、「年上の人に対しては敬語を使うことができる (M(SD) = 3.13(1.01))」という対人マナーを示すスキルに高い値が得られた。一方で、低い値となった下位スキルについては「自尊心 (M(SD) = 7.09(1.75))」のスキルであった。また、各項目については、「自分のことが好きである (M(SD) = 2.22(.82))」という自尊心を、「手に入れた情報を使って、より価値の高いものを生み出せる (M(SD) = 2.22(.82))」の情

表1. 日常生活スキル尺度の下位尺度の平均値および標準偏差 (n=124)

下位尺度	M(SD)	項目	M(SD)
親和性	7.77(1.87)	困った時に、友人らに気軽に相談することができる	2.94(.88)
		親身になって友人らに相談に乗ってもらえることができる	2.94(.85)
		どんな内容の事でも友人らと本音で話し合うことができる	3.05(.80)
リーダーシップ	7.42(1.88)	話し合いのときにみんなの意見を1つにまとめることができる	2.45(.82)
		集団で行動をするときに先頭に立ってみんなを引っ張っていくことができる	2.32(.83)
		自分が行動を起こすことによって、周囲の人を動かすことができる	2.55(.78)
計画性	7.56(2.02)	先を見通して計画を立てることができる	2.61(.68)
		課題が出ると、提出期限等を自ら決めるなどの工夫をしてやる気を出す	2.68(.88)
		やるべきことをテキパキと片づけることができる	2.68(.78)
感受性	8.23(2.44)	困っている人を見ると援助をしてあげたくなる	3.13(.93)
		他人の幸せを自分のことのように感じることができる	2.81(.87)
		悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになる	2.81(.89)
情報要約力	7.32(1.67)	手に入れた情報を使って、より価値の高いものを生み出せる	2.26(.72)
		数多くの情報の中から、本当に必要な情報を手に入れることができる	2.55(.64)
		多くの情報を基に自分の考えをまとめることができる	2.55(.74)
自尊心	7.09(1.75)	自分のことが好きである	2.22(.82)
		自分の今までの人生に満足している	2.53(.92)
		自分の言動に対して自信をもっている	2.39(.74)
前向きな思考	7.56(1.76)	嫌なことがあっても、いつまでもよくよと考えない	2.51(.99)
		困った時でも「何とかなるだろう」と楽観的に考えることができる	2.76(.94)
		何かに失敗した時に、すぐ自分はダメな人間だと思ってしまう(R)	2.39(.90)
対人マナー	8.07(3.01)	目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができる	3.07(.93)
		年上の人に対しては敬語を使うことができる	3.13(1.01)
		初対面の人に対しては言葉遣いに気を配ることができる	2.66(.95)

注1) 色付きの因子は「福祉系大学生に必要なスキル」

注2) (R): 逆転項目

表2. 性差および運動部活動所属の有無で実施した t 検定の結果

スキル	男子(n=92)		t値	所属(n=92)		t値
	M(SD)	女子(n=32) M(SD)		M(SD)	無所属(n=32) M(SD)	
個人スキル	30.10(4.48)	30.13(4.56)	.02	30.45(4.36)	29.15(4.76)	1.41
対人スキル	33.45(6.20)	35.13(5.95)	1.33	34.66(5.89)	31.63(6.45)	2.45*
親和性	8.81(2.03)	9.28(2.08)	1.11	9.09(2.00)	8.47(2.05)	1.5
リーダーシップ	7.34(1.78)	7.25(1.74)	.26	7.31(1.75)	7.34(1.82)	.07
計画性	7.81(1.94)	8.41(1.68)	1.53	8.21(1.80)	7.28(1.98)	2.43*
感受性	8.58(2.16)	9.25(2.28)	1.46	8.93(2.10)	8.25(2.44)	1.51
情報要約力	7.39(1.64)	7.25(1.27)	.44	7.47(1.52)	7.01(1.58)	1.50
自尊心	7.23(1.65)	6.84(1.88)	1.12	7.15(1.65)	7.09(1.92)	.16
前向きな思考	7.66(1.65)	7.62(1.63)	.11	7.60(1.56)	7.78(1.91)	.50
対人マナー	8.69(2.49)	9.34(2.26)	1.30	9.31(2.20)	7.56(2.66)	3.66**

注1) \*p<.05, \*\*p<.01

報要約力を表すスキルに低い値を示した。

### 3.2 性差および運動部活動の所属の有無における比較

2013年度および2012年度の福祉系大学新生における日常生活スキル尺度の各下位スキル得点を性差と運動部活動所属の有無によるt検定を行った。各下位スキルにおいて、男女間で有意な差がみられたスキルがなかったことは、山本・島本が報告した結果と同様であった。また、運動部活動に所属の有無については、対人場面で展開される対人スキルと個人スキルの下位スキルである計画性において、運動部活動に所属している学生の方が所属していない学生よりも5%水準で有意に得点が高い結果となった（対人スキル： $t(122) = 2.45, p < .05$ ）、計画性： $t(122) = 2.43, p < .05$ ）。また、相手に対して好ましい印象を与えようとする対人マナーのスキルにおいても、運動部活動に所属している学生の方が1%水準で有意に得点が高い結果となった（ $t(122) = 3.66, p < .01$ ）。

### 3.3 各下位スキルの得点間の相関

2013年度新生の各下位スキル得点間の相関関係と2012年度の新入生との比較を表1に

示した。先述した福祉系大学生に求められる3つのスキルについては、2013年度の新入生において、感受性が対人マナーとの間に.70以上の強い有意な正の相関関係が認められ（ $r = .73, p < .01$ ）、感受性と前向きな思考の間にも弱い有意な正の相関関係がみられた（ $r = .37, p < .01$ ）。また、対人マナーと前向きな思考にも弱程度の有意な正の相関関係が示された（ $r = .39, p < .01$ ）。2012年度の新入生においては、感受性が対人マナーの間に中程度の有意な相関関係が認められた（ $r = .41, p < .01$ ）。また、感受性と前向きな思考の間にも弱い有意な正の相関関係がみられ（ $r = .29, p < .01$ ）、対人マナーと前向きな思考にも弱程度の有意な正の相関関係が示された（ $r = .31, p < .01$ ）ことから、2013年度と2012年度の新入生にはほぼ同様の結果が得られた。また、大学生全般において必要と考えられる自尊心のスキルについては、福祉系大学生に求められる3つのスキルとの有意な相関関係は認められなかった。これらのことは、2012年度に実施した福祉系大学新生の調査結果と同様であったため、安定した結果といえよう。

表3. 2013年度新生の日常生活スキル尺度の下位スキル得点間の相関と2012年度新生の比較

スキル	対人マナー	前向きな思考	自尊心	情報要約力	感受性	計画性	リーダーシップ	親和性
親和性	.53**	.27*	.28*	.37**	.48**	.39**	.37**	
リーダーシップ	-.03	-.00	.35**	.40**	.02	.33**		.34**
計画性	.43**	-.07	.36**	.54**	.34**		.43**	.22
感受性	.73**	.37**	.13	.12		.44**	.33**	.34**
情報要約力	.06	-.09	.24		.23	.57**	.53**	.17
自尊心	.13	.20		.24*	.10	.12	.43**	.32**
前向きな思考	.39**		-.03	.14	.29**	.03	.14	.17
対人マナー		.31**	-.02	.22	.41**	.37**	.19	.25

注1) 対角線上部が2013年度新生の相関係数、対角線下部が2012年度新生の相関係数

注2) \*\* $p < .01$  \* $p < .05$



### 3.4 福祉系大学生のライフスキル獲得パターン

福祉系大学生のライフスキルの獲得パターンを検討するため、2012年度と2013年度の福祉系大学新入生の日常生活スキル尺度の各下位スキルの得点を標準得点に換算し、その値に基づき大規模ファイルのクラスタ分析を実施した結果、各クラスタのサンプル数や解釈のしやすさなどから、図1に示す4つのクラスタによる分類を選択した。

各クラスタの解釈について、クラスタ1は全体的に得点が低く、特に親和性と感受性、対人マナーの得点が低いことから「内向タイプ」とした。クラスタ2については、感受性と対人マナーの得点が高く、リーダーシップ、自尊心、前向きな思考が著しく低いことから「自信喪失タイプ」と解釈した。また、クラスタ3は全体的に得点が高く、日常生活に必要なスキルをバランスよく獲得していると考えられ、「全体高タイプ」とした。さらに、クラスタ4は前向きな思考の得点が高く、計画性と情報要約力が著しく低いことから、「楽

観タイプ」と命名した。

## 4. 考察

### 4-1. 福祉系大学生のライフスキル獲得レベル

本研究では、福祉系大学生を対象に日常生活場面におけるライフスキルについて、福祉系大学生に必要なと考えられる3つのスキルを性差や運動部活動所属の有無から検討し、さらにはライフスキルの獲得パターンについて明らかにした。まず、先述した福祉系大学生に求められるスキルである「感受性」、「前向きな思考」、「対人マナー」に着目した。日常生活スキル尺度の単純集計の結果においては、相手の気持ちに感情移入するスキルである「感受性」や相手に対して好印象を与えようとする「対人マナー」のスキルについて相対的に得点が高かった。また、それらのスキルと「前向きな思考」のスキルとの間で有意な正の相関関係がみられたことから、福祉系大学生に必要なライフスキルの側面を支持することが示唆された。さらに、運動部活動に

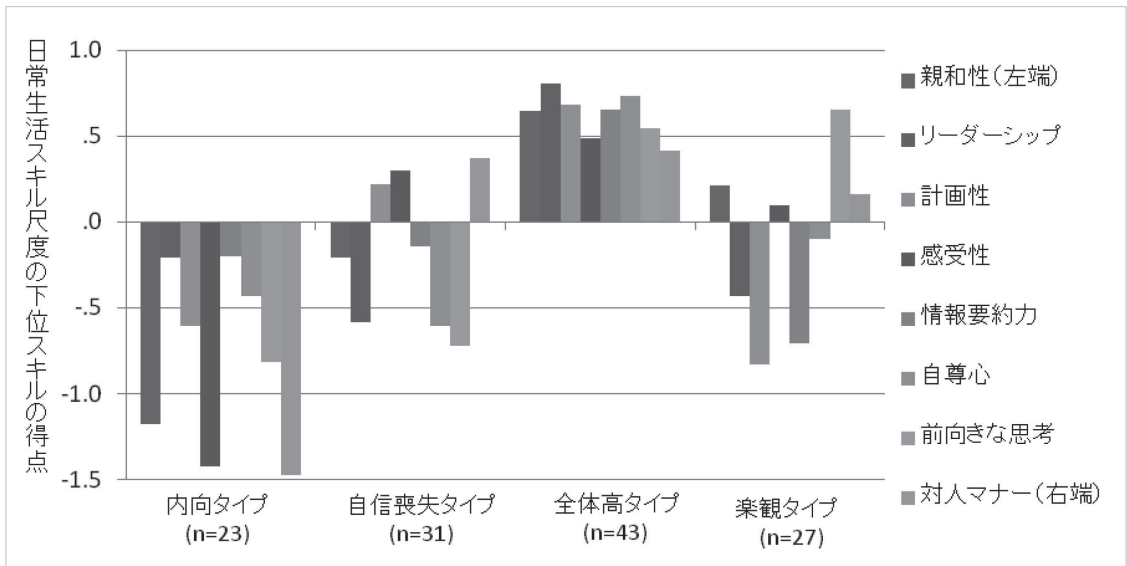


図1. 福祉系大学生のライフスキル獲得パターン (n=124)

所属している者が所属していない者よりも対人スキルにおいて高い得点を示したことは、従来の研究で報告されている結果を支持している<sup>8) 13)</sup>。しかしながら、個人的スキルにおいて有意な差が認められなかったことについては、福祉系という属性が少なからず影響していると考えられるが、福祉系大学生の特徴や傾向については報告がほとんどみられていないことから、今後の検討が必要な課題といえよう。これらのことを踏まえ、本研究では福祉系大学生におけるライフスキルの獲得パターンを検討した結果、対人関係が不得意な「内向タイプ」、自らの言動に自信を持つことができない「自信喪失タイプ」、全体的に得点が高い「全体高タイプ」、物事を楽観的に捉える傾向のある「楽観タイプ」の4つのパターンに分類された。これら4つのクラスターから分類されるように、福祉系大学生のライフスキルの特徴の1つとして、内向タイプや自信喪失タイプといった、自分自身のスキルに対する肯定的な考え方を持つことができないことが挙げられる。このことは、大学生全般に求められており、自己を肯定的に捉える自尊心の欠如やそれに伴う周囲の人間に対するリーダーシップスキルの欠如に関係していることが示唆される。実際に、自尊心とリーダーシップの間には.35以上の有意な正の相関関係がみられることから、これらのスキルは福祉系大学生がもっている特徴の1つといえよう。しかしながら、「自尊心」のスキルについては、福祉系大学生に必要な「感受性」、「前向きな思考」、「対人マナー」とは有意な関連性はみられなかった。つまり、福祉系大学生に必要な3つのスキルの獲得を試みようとしても「自尊心」の獲得には影響がないことが考えられる。「自尊心」について遠藤<sup>14)</sup>は、「自分自身の存在を価値あるものと評価し信頼することによって、自己に対しても他

者に対しても受容的であり得るとし、その意味で自尊感情は精神的健康や適応の基盤である」と述べている。これは、他者を広く受け容れる必要がある福祉系大学生にとって、その獲得は非常に重要であると考えられ、さらにはより良い学生生活への適応と心の健康を促進するためにも、福祉系という属性に関わらず「自尊心」の向上は必要なことであろう。これらのことを踏まえ、福祉系の大学側は3つのスキルに加えて「自尊心」獲得のための教育的サポートをしていく必要があるといえる。以上のことから、福祉系大学生のライフスキルの獲得レベルおよびパターンを明らかにしたが、この結果は福祉系大学生の特徴の1つに過ぎず、今後も同様の調査を実施していくことが重要であると考えられる。また、これらの結果をもとに、大学側が学生に対する教育的サポートの方略等について議論し、その指導や介入方法を検討していくことが必要であろう。そして、学生がより良く大学生活を送るために積極的に支援していくことが求められよう。

#### 4.2. 今後の課題

最後に今後の主な課題について述べる。本研究において明らかにされた福祉系大学生のライフスキルの獲得パターンをもとにした教育プログラムを考案し、講義や実技の中で取り入れることで、福祉系大学生や大学生全般に必要なライフスキルの各側面が獲得されるかを検証し、ライフスキルの側面にどのような影響があるのかについて検討していく。そして、今後も同様の調査を継続して実施していくことにより、激動の時代を生きていく大学生を含む青少年のライフスキルのさまざまな側面が、どのように変化していくかについて把握することができよう。

## 参考文献

- 1) 飯田順子, 石隈利紀: 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(中学生版)の開発—. 教育心理学研究, 50 (2), 225—236, 2002
- 2) 島本好平, 石井源信: 大学生における日常生活スキル尺度の開発. 教育心理学研究, 54 (2), 211—221, 2006
- 3) WHO: WHO ライフスキル教育プログラム. 川畑徹朗, 西岡伸紀, 高石昌弘, 石川哲也監訳, 12—16, 1997
- 4) 川畑徹朗: 健康教育とライフスキル学習の新提案—個性を伸ばし, 自己実現を支援する—. 学校運営研究, 36 (9), 14—17, 1997
- 5) Danish SJ, Petitpas AJ, Hale BD: Life Development Intervention for Athletes. The Counseling Psychologist, 21, 352—385, 1993
- 6) 上野耕平: 体育・スポーツ心理学領域におけるライフスキル研究の背景. 鳥取大学教育センター紀要, (5), 175—188, 2008
- 7) 杉山佳生: スポーツとライフスキル, 最新スポーツ心理学—その軌跡と展望. 日本スポーツ心理学会編, 69—78, 2004
- 8) 平井博志, 木内敦詞, 中村友浩: 大学期における課外活動の種類とライフスキルの関係. 大学体育学, 9 (1), 117—125, 2012
- 9) 黒木利作: 社会福祉分野でのキャリア形成・資格取得の方法, 福祉の未来形を求めて. 近畿医療福祉大学編, 34—39, 2012
- 10) 中井聖, 浦田達也, 南和広: スポーツ経験が大学生のライフスキルの獲得および形成に及ぼす影響. 滋賀県立大学国際教育センター研究紀要 (15), 165—172, 2010
- 11) 上野耕平: 運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望との関係. 体育学研究, 51, 49—60, 2006
- 12) 山本浩二, 島本好平: 福祉系大学生のライフスキル獲得の基礎的調査. 日本スポーツ心理学会第39回大会研究発表抄録集, 186—187, 2011
- 13) 上野耕平, 中込四郎: 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究, 43 (1), 33—42, 1998
- 14) 遠藤由美: 個性化された評価基準からの自尊感情再考, セルフ・エスティームの心理学. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編, 62, 1992